

植木 曜介（うえき・ようすけ）

1、プロフィール

詩人。代表作「誕生歌」。方言詩では「水樹の垣根」が『津軽の詩』（津軽書房刊）に収録されており高い評価を得ている。

<生没>

1914(大正3)年1月20日 ~ 1971(昭和46)年2月19日

<代表作>

遺稿詩集『植木曜介詩集』

方言詩「水樹の垣根」(方言詩集『津軽の詩』収録)

<青森との関わり>

弘前市に生まれる。方言詩運動に参加。戦前からの重要な地方詩人である。

2、作家解説

詩人植木曜介は本名を二川原平三郎と言い、大正3年(1914)1月20日、父二川原吉蔵、母そめを両親として、弘前市松森町124番地に生まれている。小学校は弘前市第一大成小学校に入学。大正15年に同校を卒業。4月県立弘前中学校に入学。昭和4年16才の時に同校を3学年で退学。そのあたりから長谷川邦夫、清野福蔵らと口語歌を作り、長曾部晋のペンネームで弘前市で発行されていた口語詩誌「黒百合」「短歌直線」等に作品を発表。昭和8年20才の時に第二次「北」(詩誌)に船水清らと共に植木曜介の名で詩を発表。昭和10年一戸謙三の指導で小枝九郎らと方言詩誌「芝生」を発行。その後「弘前詩話会」を経て、「干戈」「耄年」第三次「北」等、多くの地方詩誌運動に参加している。昭和46年58才で弘前市品川町鳴海病院で逝去。詩集は生前にはなく、没後友人らの手による『植木曜介詩集』1冊が残されている。

3、資料紹介

○『植木曜介詩集』

図書

1971(昭和 46)年8月 15 日

215mm×155mm

「詩集などというものは、死んでからもしその作品がよかったら、他の人が出してくれればよいものだ」が持論。曜介没後6ヶ月後に植木曜介詩集編纂委員会が刊行したもので、繰り返したわれる悔恨と死は、深い孤独への沈潜から生まれたもの。方言詩も収める。